

古代建築の架構・天井・組物に みる「見せる」要素と「隠す」要素

—第一次大極殿院の復原研究12—

1 はじめに

第一次大極殿院東西楼は遺構・出土遺物より、側通りを径約75cmの掘立柱、内部柱を径約45cmの礎石建とする特殊な構造で、その上部構造は側柱を通柱とすると考えられる。柱配置は桁行5間（15.5尺等間）・梁行3間（13尺等間）で、隅の柱間寸法が桁行・梁行で異なり、隅木をもたない切妻造と考えるのが通例であるが、隅木蓋瓦が出土することから、隅木をもつ屋根形式（入母屋造もしくは寄棟造）と推定される。これらの特徴は現存する古代建築に類をみない。

この特殊な東西楼の上部構造を検討する第一歩として、わが国の古代建築を対象に、組物・屋根架構・天井を整理したところ、屋根を支える架構に「見せる」（意匠的機能を有する）ものと「隠す」ものがあり、これらの架構形式が天井と深く関係することがあきらかとなった。すなわち、天井には空間の荘厳に加え、屋根架構を「隠す」という効果がうかがえるのである。よって「見せる」架構と「隠す」架構という視点から論じたい。

また奈良時代の主要建築の完成された形式は三手先・折上天井・小天井とされるが¹⁾、天井と組物の形式にはどのような関係があるのであろうか。これら屋根架構・天井・組物の相互の関係性を検討し、奈良時代建築の格式と形の意味について述べたい。

2 屋根架構と天井の有無

古代の屋根架構には、土居桁を用いた特殊な構造である平等院鳳凰堂を除き、大きく分けて「梁・束式」・「二重虹梁臺股式」・「虹梁・叉首式」の3種類がある（表I-1）。
梁・束式（図I-1左） 鎌倉時代に改造された唐招提寺講堂を除くと、梁・束式の事例は10例、確認できる。こ

のうち法隆寺金堂・中門・大講堂を除き、すべて倉である。法隆寺金堂・中門は下層の天井、同大講堂は組入天井によって、梁・束式の架構を隠している。これに対し、倉はすべて化粧屋根裏で、梁・束式の架構がみえる。倉は儀式空間ではなく、通常、人の立ち入りも少ないため、屋根架構を「見せる」意識はないが、儀式空間として使用する法隆寺大講堂は、天井によって、梁・束式の架構を隠すのである。ここから梁・束式の架構は、それ自体を意匠とするのではなく、「見せる」ことのない、「隠す」架構と推察される。

二重虹梁臺股式（図I-1中央） 二重虹梁臺股は倉には用いられず、またすべての事例で化粧屋根裏としており、架構を「見せる」という特徴が強く表れている。

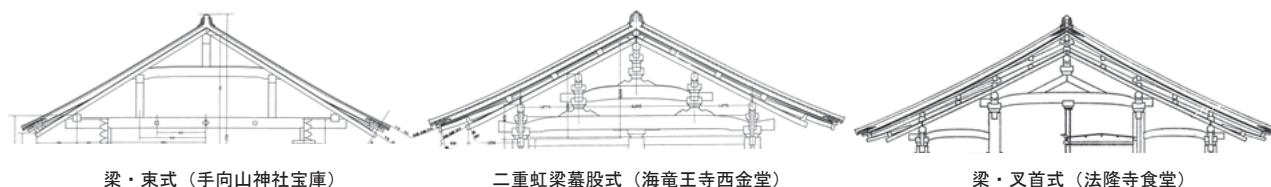
梁・叉首式（図I-1右） 梁・叉首（虹梁・叉首）に関しては、唐招提寺金堂や東大寺法華堂のように、天井で架構を「隠す」事例や倉である唐招提寺経蔵のように「見せる」ことのない場所で用いられる事例もある。しかし法隆寺廻廊・食堂・妻室・東室・新薬師寺本堂のように、化粧屋根裏とする事例が数多くあることから、梁・叉首式は概して「見せる」架構といえる。

「見せる」架構と「隠す」架構 このように、梁・束式は天井で「隠す」架構であるのに対し、二重虹梁臺股式や梁・叉首式は、それ自体を意匠として「見せる」架構であるといえる。

3 組物と天井形式

では組物と天井の形式には関係があるのであろうか。屋根架構とは異なり、組物・天井はともに、「見せる」要素である。なお身舎・廂の柱配置の場合、外部の組物と身舎の天井は、直接の構造的関係にはないが、一定の相関関係がある（図I-2）。

折上天井・小天井（三手先・出組） 表I-1にあげた現存建築のうち、折上天井は組物と天井の関係が顕著である。折上天井は鎌倉時代の改造による唐招提寺講堂（出



図I-1 屋根架構の3形式

表 I-1 古代の現存建築（塔を除く）にみる屋根形式・組物・架構・天井

	屋根形式	外側組物	架構	天井	備考
法隆寺金堂	入母屋	雲斗雲肘木	梁東式	—	上層は天井を張らない。
法隆寺中門	入母屋	雲斗雲肘木	梁東式	—	上層は天井を張らない。
手向山神社宝庫	寄棟	なし	梁東式	化粧屋根裏	
新薬師寺本堂	入母屋	大斗肘木	虹梁・叉首	化粧屋根裏	
正倉院正倉	寄棟	なし	梁東式	化粧屋根裏	
唐招提寺金堂（当初）	寄棟	三手先	梁・叉首	折上天井+小天井	虹梁は小屋組を直接、支えず。天井と小屋組分離。内部は二手先。
唐招提寺経蔵	寄棟	なし	梁・叉首	化粧屋根裏	
唐招提寺講堂	入母屋 （切妻造）	出三斗 （大斗肘木）	梁東式 （二重虹梁葦股）	折上天井+小天井 （化粧屋根裏）	内部は二手分、出る。 カッコ内は移築。
唐招提寺宝蔵	寄棟	なし	梁東式	化粧屋根裏	
東大寺法華堂（当初）	寄棟	出組	虹梁葦股+梁+叉首	折上天井 +小天井	内部は一手先。現状は虹梁葦股+束式、 折上天井+小天井。
東大寺本坊経庫	寄棟	なし	梁東式	化粧屋根裏	
東大寺勧進所経庫	寄棟	なし	梁東式	化粧屋根裏	
法隆寺綱封蔵	寄棟	なし	梁東式	化粧屋根裏	
法隆寺大講堂	入母屋	平三斗	梁東式	組入天井	内部は手先なし。
當麻寺本堂（曼荼羅堂）前身堂	寄棟	大斗肘木	二重虹梁葦股	化粧屋根裏	
東大寺法華堂経庫	寄棟	なし	梁東式	化粧屋根裏	
平等院鳳凰堂 中堂	入母屋	三手先	虹梁葦股+土居桁+梁東式	折上天井+小天井	内部は二手先。
平等院鳳凰堂 両翼廊	切妻	平三斗	二重虹梁葦股	化粧屋根裏	
室生寺金堂（当初）	入母屋	大斗肘木	豕叉首	化粧屋根裏	内部は手先なし。 現状は寄棟造、組入天井。
法隆寺廻廊	切妻	平三斗	虹梁・叉首	化粧屋根裏	
法隆寺経蔵	切妻	平三斗	二重虹梁葦股	化粧屋根裏	
法隆寺食堂	切妻	大斗肘木	虹梁・叉首	化粧屋根裏	
法隆寺細殿	切妻	大斗肘木	虹梁葦股	化粧屋根裏	
法隆寺東院伝法堂	切妻	大斗肘木	二重虹梁葦股	化粧屋根裏	
法隆寺東室	切妻	なし	梁・叉首	化粧屋根裏	
法隆寺東大門	切妻	平三斗	虹梁葦股+束	化粧屋根裏	三棟造。
法隆寺鐘樓	切妻	平三斗	二重虹梁葦股	化粧屋根裏	
法隆寺妻室	切妻	なし	梁・叉首	化粧屋根裏	
海竜王寺西金堂	切妻	平三斗	二重虹梁葦股	化粧屋根裏	
東大寺転害門	切妻	出組	虹梁葦股+梁東式	化粧屋根裏・組入天井	三棟造。当初は平三斗。

* 平安時代中期以前の建物に、奈良時代の形式が復元されている當麻寺本堂（曼荼羅堂）と奈良時代の形式を示す法隆寺妻室を加えた。なお平安時代後期の建築には、阿弥陀堂形式の三間堂が多いため、これを除外した。

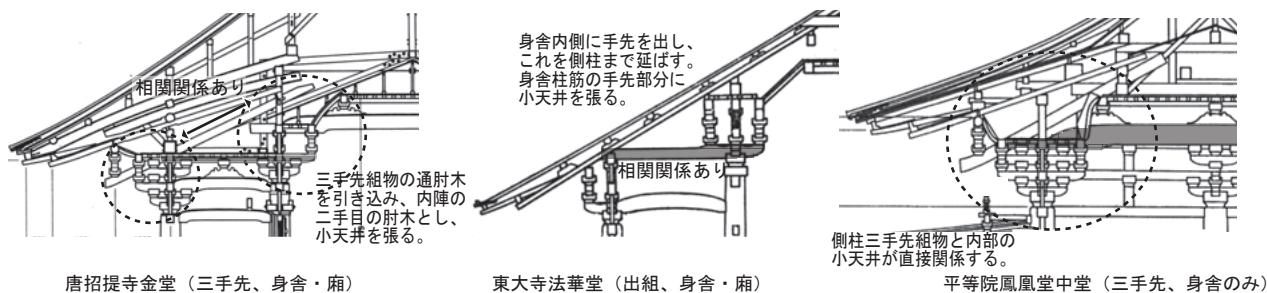


図 I-2 手先の出る組物と天井の関係

組）を除くと、三手先の唐招提寺金堂・平等院鳳凰堂中堂と出組の東大寺法華堂に限られており、ともに手先の出る組物である。

唐招提寺金堂では、身舎を折上天井、廂を組入天井とする。側通りの二手目の肘木を内側では虹梁とし、身舎柱の頭貫の高さで繋げ、最上段の通肘木を廂の天井桁、さらには身舎内側の二手目の肘木として引き込む。この身舎内側の手先により、小天井を張り、さらに折上天井とする。すなわち、側通りの手先を出す組物は身舎内側の組物と無関係ではなく、影響を与えているのである。

また身舎・廂の天井形式を比べると、身舎の折上天井の方が意匠的に格上と推察される。

東大寺法華堂では、身舎を折上天井、廂を化粧屋根裏とし、身舎内側の肘木を一手分、出しており、これを側柱まで延ばし、入側柱と側柱を繋ぐ。そして身舎内側の手先により、小天井を張り、さらに折上天井とする。

平等院鳳凰堂中堂では、身舎のみの柱配置で、内側に3段の肘木を組み上げ、ここに小天井を張り、さらに内側を折上組入天井とする。

このように三手先・出組では、外側と同様に、身舎内

側にも手先を出し、そこに小天井を張り、その内側を折上天井とするのである。

組入天井（平三斗） 法隆寺金堂廂・中門・唐招提寺金堂廂にもみられるが、身舎では法隆寺大講堂の1例のみである。身舎柱上の組物も平三斗で、手先を出さないため、小天井を張る必要がなく、折上天井とはしない。なお廂は化粧屋根裏である。

法隆寺大講堂は、中世以降の屋根架構の基礎となる野屋根を用いており、さらに架構は「見せない」、梁・束式である。この法隆寺大講堂の平三斗・組入天井という形式は、手先を出さずに天井を張る1つの事例として評価できる。また廂では野小屋を隠したうえで、化粧屋根裏とするのに対し、身舎では組入天井とすることから、天井による両者の空間的な差別化が読み取れ、組入天井の方が意匠的に格上と考えられる。

唐招提寺金堂廂や法隆寺金堂・中門の組入天井も、三手先組物の尾垂木や二重の小屋組を隠しており、法隆寺大講堂と同様に、「隠す」方法である。

化粧屋根裏（平三斗・大斗肘木・組物なし） 化粧屋根裏は、手先が出ない組物や組物のない事例に限られている。平三斗は、上述の法隆寺大講堂のように組入天井を張ることもあるが、大斗肘木や組物なしの建物には天井を張る事例は確認できない。

4 組物と天井にみる建築の形とその意味

このように古代建築の屋根架構・組物・天井の関係を概観すると、それぞれが独立するのではなく、屋根架構と天井、天井と組物は、相互に密接に関連していることがあきらかとなった。これを受けて、建築の格式と形の意味について述べたい。

建物の格式からみた組物と天井 四手先以上を例外とすると、組物のなかでは、三手先が最高級であったとされ、深い軒を支持するため、手先を出す組物の格が相対的に高いとされる。これに対し、天井では、折上天井・小天井、組入天井、化粧屋根裏の順に格の差違がうかがえた。

これらの天井の形式は組物の形式と関連が強く、手先を出す組物では折上天井・小天井を張り、それ以外の場合では基本的に天井を張らなかったが、廂部分や平三斗と組みあわせて組入天井を用いることもあった。

このように、組物・天井には格の違いがあり、これま

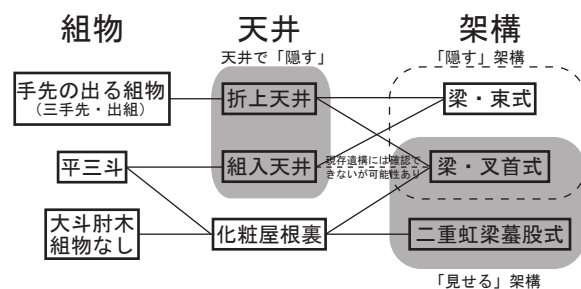


図 I-3 組物・天井・架構の相関関係

で想定されてきた「三手先、折上天井・小天井」という形式が、現存建築をみる限り、奈良時代の主要建築の完成された形式であることが再確認でき、それらの相互に深い関係性を示していた。本論では屋根形式に言及しなかったが、手先を出す組物では、切妻造の屋根形式は困難で、入母屋造・寄棟造とする必要がある。この点からも、隅のある屋根形式の切妻造に対する優位性がうかがえる。すなわち組物・天井・屋根架構という形が、それぞれの有する格式や意味に加え、これらが相乗的に機能していたのである。

天井を介した相関関係 これに対し、組物と屋根架構の直接的な関係性は明確ではない。すなわち、屋根架構・組物・天井の3者は天井を介することで、はじめて相関関係を示すのである（図 I-3）。もちろん、天井の構造的な役割は、屋根架構や組物と比較すると小さいが、天井の「隠す」要素が建築の形態に対して一定の影響を与えていたのである。特に二重虹梁墓股は強い意匠性を示しており、古代建築の設計理念上、天井と併用されることはなかった。

設計理念の継承 こうした点からみると、唐招提寺講堂の改造には古代の設計理念の継承がうかがえる。当初、二重虹梁墓股・大斗肘木・化粧屋根裏であったが、鎌倉時代に桔木を挿入し、架構を折上天井で隠した構造（出組）とした。この改造により、当初の二重虹梁墓股の「見せる」要素を活かした設計理念は失われたが、手先を出す組物と折上天井という古代建築の関係性を維持したものであった。すなわち古代建築の特質を維持しつつ、「見せる」架構から「隠す」架構へと姿を変えたと評価できる。

このように、古来より示されてきた構造と意匠の関係を再検討したところ、天井という「隠す」ツールを介して、相互に密接に関係してきた。本論であきらかとなった古代建築の屋根架構・組物・天井の関係性を東西楼の上部構造の復原に活かしていきたい。（海野 聡）

註

1) 大岡實『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966ほか。